

2018 年度京都大学 11 月祭研究報告
「視覚障害と情報取得」

京都大学点訳サークル

水上佳理奈 桐村慎太郎 多胡優作 山根匠

まえがき

「情報」—この言葉から何が思い浮かぶでしょうか？ ネット社会の今日では、多様なウェブサイトアクセスできるインターネットを多くの方が連想するかもしれません。しかし、塩基配列から成る遺伝情報に思いを馳せる方もいるでしょう。刑事ドラマ愛好家であれば、タレコミや情報屋といった用語が頭をよぎるかもしれません。

このように「情報」という言葉には様々な意味を結び付けることができますが、視覚障害に関係するテキストで「情報」という語が登場するとき、それは往々にして視覚から得られる情報という意味で用いられます。目の前の信号が青になった、あの立て看板にはゴリラが描かれている、彼はチェックシャツに眼鏡というイカ京スタイルだ。これらは全て、晴眼者（視覚に障害のない人）が視覚を用いて当然に得ている「情報」です。

では、視覚障害者についてはどうなのでしょう？ 晴眼者の付き添いなしにこうした視覚情報を得ることはできないのでしょうか？ そうとも言えないというのが答えです。ロービジョン（見えにくい）の場合は程度の差こそあれ、周りを見渡して一定の事物を何らかの形で認識できます。全盲であっても、視覚以外の感覚を通して、晴眼者が視覚を通して取得するような情報を把握することができます。

今年度の研究調査は、視覚障害者がこうした「情報」を取得する術に主として焦点を当てました。「視覚障がいと崩し字」は古文書に現れる崩し字というユニークな観点から、視覚障害者の文字「情報」の取得について論じています。「大学構内の点字」と「身の回りの点字」では、視覚障害者が「情報」を取得する一手段である点字について、晴眼者がとっつきやすいような身近なものに焦点を当てて調査・考察しています。街の「情報」、字という「情報」、そして「情報」を得る手段としての点字。今年度の研究報告を通じて、晴眼者が何気なく視覚から得ている「情報」と視覚障害者の関わりを、少しでもご紹介できれば幸いです。

最後になりますが、今回の研究報告をまとめるにあたって、視覚障害当事者からの情報提供に大変支えられました。また、11月祭パンフレットの点訳・11月祭での視覚障害関係用具の展示という当サークルの二大おまつり事業は、それぞれ京都大学障害学生支援ルームと京都ライトハウスのご好意なくしては行うことができません。ご協力いただいた皆さま、本当にありがとうございました。

視覚障がいと崩し字

水上佳理奈

はじめに

国語学国文学や日本史の研究で必ずつきまとうのが崩し字の問題である。資料集や博物館で見たことのある人も多いと思うが、近代以前の日本人は、今のような楷書ではなく、字形を崩し、字と字を連続させて書く崩し字で書簡を書くことがほとんどだった。大学の研究では原典にあたることも大切と言われる。しかし、目が不自由な人が崩し字を読むことは果たして可能なのだろうか。崩し字など読めても日常には何も役に立たないと思われるかもしれないが、高等教育機関の中での、視覚障害と崩し字という問題について、少し考察してみたいと思う。資料が少なく信憑性に欠けるかもしれないが、お付き合い願いたい。

本論

広瀬浩二郎氏は京都大学初の全盲の学生であり、日本史を専攻していた。日本史でも崩し字の問題がつきまとうようで、広瀬氏はその体験を著書『さわる文化への招待―触覚で見る手学問のすすめ―』で述べている。

広瀬氏は当初、立体コピー機を用いて崩し字を読もうとした。しかし、瞬時に無理と悟った。教授の提案で拡大コピーしたものを立体コピーして読もうと試みたが、文字の判別がつかなかった。広瀬氏は崩し字について次のように考察している。

考えてみると、古文書には複雑な線の組み合わせ、目で読むのも困難な崩し字が並んでいるわけです。点字と違って、線をたどって読むというのは触覚には適していない。トレーニングして漢数字や「右・左」など簡単な字が少し触読できるようになっても、古文書を解読、解釈するレベルとは程遠い。…（参考文献 1,pp18）

通常の点字は6点で一文字一文字が区切られており、かつ文節や文末にはマスあけが行われるなど、文字や単語、文章の区切りが明示されている。線が入り組む崩し字とは、触覚で認識しなくてはならない程度に大きな差があるということだろう。

そもそも、事的前提として、視覚障がい者が文字を字形で認識することは可能なのだろうか。点字や点字ブロックなど、視覚障がい者の文字や用具の中には触覚を中心とするものが多い為、崩し字も「触る」という発想を簡単にしていたが、点や図形の認識と字形の認識は違う次元なのではないかということに思い至った。また、崩し字の字母は全て漢字で表される。崩し字の問題を考えるには、視覚障がい者の漢字学習も考える必要がある。

漢点字には川上泰一氏が考案した 8 点漢字、長谷川貞夫氏が考案した 6 点漢字が存在する。このうち、8 点漢字は、部首に対応する符号を決めて、基本的に 2 マスで一つの漢字を示すという方式を取る。和久田 (1999) は、8 点漢字とパソコンの音声により漢籍を読むことができるのではないかと試みている。しかし、漢点字も、点という記号により別の形態に読み替えられたものであり、そのままの字形を触って認識するというものではない。崩し字の字母を確定する段階に当り、その漢字の存在や読みを知っているということは、重要なことなのだが、それを崩すとなると、やはり字全体の形を知ることが不可欠のように思われる。しかし、筆者の調べ方が足りないのか、それとも稀なケースなのか、字形から漢字を学ぶといった、確たる学習実践記録は見つけられなかった。明治時代には、木板に墨字を浮き彫りにしていたというが、その使用は限定的であったようだ。現段階では、視覚障がい者が字形を認識するのは難しいと結論付けられる。

おわりに

視覚障がい者が崩し字を読むには、点図のように、そのままの形を触って認識する能力が必要である。今回は、崩し字の連綿という特徴から、まず、楷書での漢字の字形学習を取り上げたが、どのような形であれ、字形認識が重要なことは間違いないだろう。しかし、字形認識は簡単ではなく、相当の訓練が必要であると思う。又、楷書での字形認識が可能になったとして、曲線が入り混じる崩し字に応用できるかは分からない。字形認識は、あくまで、崩し字解読のための可能性の 1 つに過ぎない。

崩し字ができなければ古典や日本史の研究はできないのかと言われれば決してそうではない。広瀬氏のように、古文書を使わずに別の観点から研究をしている方もいる。滋賀県立大学人間文化学部の中井均教授も、「古文書は直接読めなくても、点訳などで理解でき、違った視点から読み込むこともできる」と述べている。ⁱしかし、崩し字を読むことができるようになれば、研究手段が大きく広がることになる。実際、伊藤哲也氏を中心に、崩し字の色読を試みる研究は進められている。ⁱⁱ

情報技術の発展や漢点字の発明により、視覚障がい者の学びの範囲が広がったように、新技術・知識の発展により、崩し字の解読ができる日が来るかもしれない。

参考文献

1. 広瀬浩二郎『さわる文化への招待―触覚で見る手学問のすすめ―』(2009、世界思想社)
2. 和久田哲司(1999)「視覚障害者のための漢籍講読法の一つの試み」『筑波技術短期大学テクノレポート』第 6 巻、pp151-153、<http://hdl.handle.net/10460/433>
3. 「県立大に初の全盲学生 「学べることうれしい」東近江の村松明日香さん入学 / 滋賀県」2016 年 4 月 7 日、朝日新聞朝刊、滋賀全県、23 面

4. 宮村健二(1994)「視覚障害者と漢字」『筑波技術短期大学テクノレポート』第1巻、pp1-3、<http://hdl.handle.net/10460/433>
5. 「視覚障害者と共に古写本の仮名文字を読み日本古典文学を共有するための挑戦的調査研究」、<http://genjiito.sakura.ne.jp/touchread/>、2018年11月5日確認

i 参考文献 3

ii 参考文献 5

大学構内の点字

1. はじめに

学内には教室番号の点字表示がない建物もあります。英語の授業を受けるため席に着くと、イタリア語が周囲から聞こえはじめ、慌てて隣の教室に移動したこともありました。

今年度の「オンキヨー世界点字作文コンクール」で最優秀オーツキ賞に輝いた作文の一節である[注1]。書き手は、点字を使う視覚障害者。視覚障害のある大学生が教室を区別できるよう工夫することの意義が読み取れる。

前章では大学構内の点字を概観した。冒頭の一節からも示唆されるように、たしかにその意義も推察される。だが、果たして本当に視覚障害学生は点字表示を求めているのだろうか？ 実際のところ、点字表示を使っているのだろうか？ そして、視覚障害学生の立場から見て現状の点字表示は十分なのだろうか？

こうした疑問から、大学構内の点字表示に関するアンケートを視覚障害学生に行った。ご協力いただいたのは、視覚障害学生と点訳サークル会員から主に構成される、関西 Student Library [注2]という団体である。その会員である点字使用者8人に、点字表示の使用頻度や存在有無、また当該表示への不満や要望などを尋ねた。また、一部の視覚障害学生には追加で聞き取り調査を行い、アンケートより立ち入って、思うところを話してもらった。本章では、この調査の結果を通じて、視覚障害学生が大学構内の点字表示とどう関わっているかを提示した上で、大学（主として京都大学）の点字表示の現状と突き合せながら、視覚障害学生から見てより望ましい点字表示のあり方を達成するために何ができるのかを検討する。

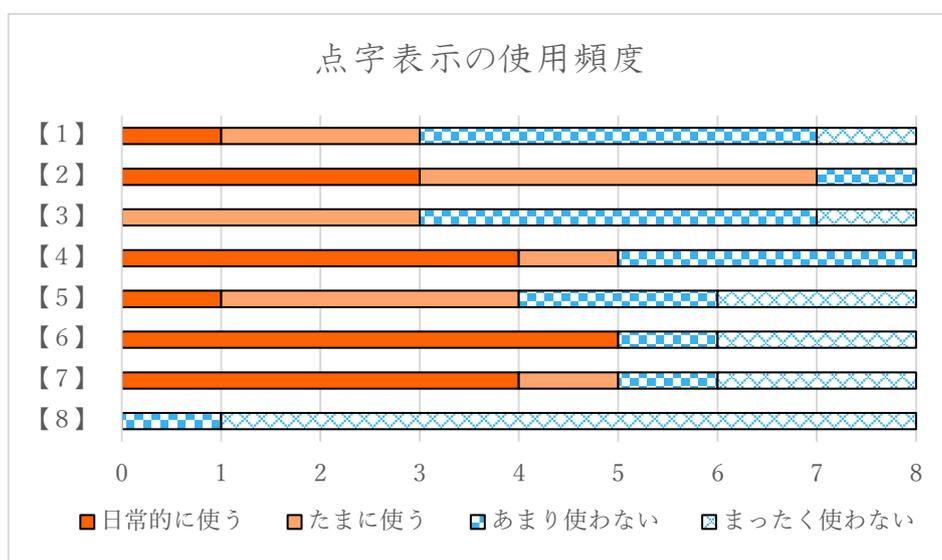
2. 調査結果

(1) アンケート調査の結果

① 点字ユーザーが大学構内の点字表示を使う度合

視覚障害学生8人に、以下の点字表示の使用頻度を「日常的に使う」「たまに使う」「あまり使わない」「全く使わない」の4段階で回答してもらった。自らの通う大学に当該点字が存在しない場合には、大学にそれがあると仮定したとき、どれくらい使うだろうかを同じ4段階で回答してもらった。その結果を表・グラフにすると以下のようなになる（単位は人）。

	日常的に使う	たまに使う	あまり使わない	全く使わない
【1】フロアマップの点図・点字	1	2	4	1
【2】講義室のドア付近にある教室名を示した点字	3	4	1	0
【3】トイレ入口付近にあるトイレ配置等の点図・点字	0	3	4	1
【4】トイレ内のボタンについている点字	4	1	3	0
【5】階段の手すりにある点字案内	1	3	2	2
【6】エレベーター内のボタンについている点字	5	0	1	2
【7】エレベーター乗り口の「うえ」「した」などの点字	4	1	1	2
【8】エレベーター乗り口にある注意書きの点字	0	0	1	7



② 点字表示の導入が求められる箇所

上記の各点字表示について、自らの大学には存在しない（または存在不明である）が、もしも当該表示があれば「日常的に使う」又は「たまに使う」と回答した人数を集計すると、下表のような結果が得られた。

点字案内	回答者数
【1】フロアマップの点図・点字	3人
【4】トイレ内のボタンについている点字	3人
【3】トイレの入口付近にあるトイレ配置等の点図・点字	2人
【5】階段の手すりにある点字案内	1人

③ 上記以外で使うことのある大学構内の点字表示

- ・ 学食の食券の券売機についている点字。大学職員の方が、メニューと値段をシールに打点してボタンに付けている。ただし、点字で示されているのは「パスタ」といったレベルまでであり、メニューや値段の変更に伴う点字修正作業の必要はあまり生じない一方、今日のパスタのソースまでは点字表示からわからない。
- ・ 学内放送のアルバイトをしているが、放送機材のボタンに点字が付いており、放送を流すまでの操作順が示されている。「主電源 1」と表記されている。
- ・ レターボックスに点字を付けてもらっている。授業資料のデータなどをボックスに入れてもらい、そこから自分の都合の良い時に資料を取れるようにすることで、職員さんと直接会うための時間をわざわざ作らなくてよいので役立つ。ただ、数回ほどでボックスの位置を覚えるので、点字を触って確認することはほとんどない。

④ 大学構内の点字表示に対する不満・改善点・要望

- ・ トイレについて男子用か女子用かわからないのは問題。以前、男子・女子トイレの位置を識別するための音声案内を設置してもらえないか大学に相談したが、音がうるさいという理由で却下された。音声でなくても、男子トイレか女子トイレかを示した点字をドアに付けるなどして区別してほしい。
- ・ 全ての教室に点字が付いていればありがたい。
- ・ 建物によっては教室番号が点字で書かれていないので全館の教室に点字で番号を書いてほしい。
- ・ 教室番号を記した点字の位置を統一してほしい。
- ・ トイレの点字表示も含め同じ場所に設置してほしい。設置場所が異なると表示を探しづらい。
- ・ 点字表示の設置場所はできるだけ統一する必要がある（教室番号ならドアの左右どちらについているかや、高さなど）。
- ・ 点字や点図がどこにあるのかが分からないと使えないので、それを知ることでできる仕組みがあればいいのにと感じることもある。
- ・ 点字シールは勝手に剥がされないものにしてほしい。
- ・ 点字が消えかけているものは新しくはりかえてほしい。
- ・ 教室番号を示した点字表示について、点が取れて記号として変わってしまっていたり、読み取れなかったりすることがある。

- ・劣化してはがれていたり、消えかかっていたりすることがしばしばあるので、一度設置した点字・触地図の定期的なメンテナンスはすべきであると思う。
- ・自動販売機に点字をつけてほしい。以前、大学に要望したが、商品や値段が変わるので難しいという理由で、実現しなかった。
- ・自動販売機に点字表示があると良い。
- ・大学の敷地や建物の点図が欲しい。
- ・キャンパス内のおおよその地理、建物の位置関係を把握できるような触地図があるとよい。どこかに固定して設置するよりは、立体コピーや紙に印字する点図のようなものの方が望ましいかもしれない。

(2) 事後調査の結果

アンケートの回答において大学構内の点字表示の不統一に対する指摘が多く見受けられたことを受けて、京都大学ではどうなのかを事後調査した(調査日:11月9日)。キャンパス内のいくつかの建物を選び、その1階から3階(百周年時計台記念館はB1~2階)のフロアを見て回って確認できたことを以下に記す。

① 校舎間における、点字表示の存在有無の相違

先ほどの8つの点字表示のうち4つ(【1】フロアマップの点図・点字、【2】講義室のドア付近にある教室名を示した点字、【3】トイレ入口付近にあるトイレ配置等の点図・点字、【5】階段の手すりにある点字案内)を取り上げ、それが以下に挙げる各建物に存在するかどうかを表にまとめると以下ようになる。なお、建物内で存在が一つでも確認できれば○、見つけられなければ×としている。

	フロアマップ	講義室	トイレ入口	階段の手すり
百周年時計台記念館	○	—(※)	○	×
法経本館	×	×	×	○
文学部校舎	○	○	○	○
総合研究2号館	×	○	○	○
理学部6号館	×	×	○	○
吉田南総合館	×	×	○	○
国際高等教育院棟	×	×	○	○

※ 百周年時計台記念館には講義室がない。

② 点字表示の方式の相違

①で調査した建物の多くが、トイレ入口に何らかの点字表示を用意している。だが、その方式は多様だ。点図を掲示してトイレの配置を示すものと、「男子トイレ」などと打点されたプレートをトイレ入口の壁に取り付けて男女の区別を図るものの大きく2方式が存在する。その組み合わせ方などをもう少し細かく見ると、次のようなパターンがキャンパス内で（時には同じ建物内で）混在している。

- (a) 点図もプレートも両方存在
（文学部校舎1階西側、総合研究2号館、理学部6号館南側1階）
- (b) 男子・女子・多機能トイレの配置を示した点図のみが存在
（百周年時計台記念館、理学部6号館北側、吉田南総合館北棟）
- (c) 多機能トイレの内部構造だけを示した点図のみが存在
（国際高等教育院棟）
- (d) プレートのみが存在
（文学部校舎の大半、理学部6号館南側の2階以上）
- (e) 点字案内が不存在
（法経本館、吉田南総合館西棟）

3. 調査をうけて

(0) 考察の前に

調査結果をまとめる前に、2つほど注意をさせていただきたい。一つ目は、アンケート調査はあくまで目安だということである。アンケートの回答者数は8人であり、サンプル数として非常に少ない。それゆえ、特に点字表示の使用頻度などは「今回の調査ではこうなった」という程度のものであることを予めおことわりしたい。

二つ目はエレベーター関係の点字についてである。エレベーターをそもそも普段使わないが、もし一人でエレベーターを使うとしたら、当該点字も使うと回答された方を「日常的に使う」として計上している。その設備を使うに際して点字表示を求める度合を示したかったからである。だが、エレベーター関係の点字について、実際の当該点字への需要は調査結果よりも小さいだろうことを付言しておく。

(1) 大学構内の点字表示の必要性

アンケート調査結果①から、大学構内の点字表示は一定数の視覚障害学生に実際に利用されるものであることがわかった。調査で目立ったのは教室番号を示す点字表示の利用者の多さである。また、トイレの入口付近にあるトイレ配置等の点図・点字に関して、聞き取り調査の中で2人からトイレの男女を区別するために用いるというコメントが得られた。

この調査に限っての話ではあるが、同様の構造物における入口の区別という点において点字表示の価値が高そうな印象を受けた。

また、自らの通う大学には無いが、大学に存在していれば使うと複数人が回答した点字表示もいくつかあり、点字表示はまだ整備の余地があることもわかった（アンケート調査結果②）。さらに、③からは点字を用いて点字ユーザーにわかりやすいよう工夫される例が見られた。たしかに、点字表示が視覚障害学生への情報提供に大きく寄与しているとまではいえない部分もあるが、それらは決して無駄なものではなく、点字ユーザーに情報を提供する手段としてそれなりの意義を持っているといえよう。

（２）点字表示の改善の余地

アンケート調査結果④に依拠しつつ、事後調査等も踏まえて、大学構内の点字表示をより視覚障害学生に望まれる形とするためにできることを５つ検討していく。

① 全ての校舎（の教室）で点字表示を付け、その場所を統一する

アンケート回答者から点字表示に対して最も多く寄せられた記述は、「点字表示を全ての校舎・全ての場所で統一した位置に付けるべき」という指摘だった。教室番号を示した点字付きのプレートが大学内に存在したりしなかったりすると、晴眼者であれば、広く教室外の壁を眺め、そのプレートの有無・場所を一瞬で認識できる。だが、点字ユーザーの場合、触る高さや位置を変えながらプレートのありそうな場所を確認していく。プレートがない場合、その候補位置を全て確認し、探り当たらないという事実の集積をもって「存在しない（かもしれない）」という結論に達する。ボトムアップ的なこの認識の仕方を考慮に入れると、「どこであっても同じ位置に必ず点字表示がある」状況は目的の表示に容易にたどり着くために重要である。

ここで大学の現状を見ると、事後調査から明らかなように、京都大学では建物によって点字案内の有無・方式が統一されていないことがわかる。対照的なのが立命館大学である。立命館大学衣笠キャンパス内の、講義室を持つ建物１４棟のうち１３棟[注３]を訪れて、その点字表示を見て回ったが、その全ての棟の教室およびトイレで同じ形式の点字付きプレートを採用していた。また、これらの棟のすべてが、点字・点図を伴うフロアマップを１階に設置していることが確認できた（写真１[注４]）。このような例を見ると、京都大学の点字表示は完全性・統一性の面でより良くできそうである。



(写真1)
 左から教室番号を示すプレート、トイレの男女を示すプレート、フロアマップ(立命館大学)
 拡大すると、点字が確認できる。同種の点字表示が、調査した13棟全てで用いられている。

② 点字表示の存在をユーザーに知らせる

前述したとおり、点字ユーザーは外界を広く見渡して目的物を発見することに困難があるため、「ここに点字案内板があります」というような音声誘導なしに、ただ点字や点図が静かに鎮座しているだけでは、それに気づかないことがある[注5]。したがって、その存在を知らせる情報提供があることが望ましい。

その方法として音声と点字ブロックがまず思いつくかもしれない。しかし、音声案内はむやみに設置するとうるさい。また、点字ブロックを点字表示の前に敷設するだけで必ずしも良い訳ではないことが聞き取り調査の中で感じられた。すなわち、点字ブロックは通路に沿って敷設される線状ブロックと注意喚起を促す点状ブロックの2種類のみである。つまり、点状ブロックが点図の前であっても、ブロックはただ単に注意を喚起するだけで、その喚起が階段の前だからなのか、建物の入口だからなのか、前に点図があるからなのかはわからない。「この点状ブロックの前には点字表示があるのだろう」と意味付けされて初めて表示に手を伸ばしてそれに気づくのであって、ブロックが表示の前にただ存在するだけでは必ずしも十分とはいえない。

ここで、重要になるのが先ほどの完全性・統一性だと考えられる。全ての校舎で同じ位

④ 自動販売機に点字を付ける

アンケート調査では、自動販売機に点字を付すことへの言及が複数見られた。硬貨投入口やおつり返却レバーに点字で「コイン」「返却」などと書かれていることはあるが、それだけでなく、商品名と値段を点字でも記載することが望まれている。これには商品や値段の変更に伴う点字の更新が課題となる。例えば、京都ライトハウスの自動販売機には、「金の微糖 缶 ホット 120」などと点字で打ったカードを、取り出し可能な状態で自販機のボタンの上に配置して対応している。大学についていえば、自販機の点字化をNPOと契約した例として宮城教育大学生協が挙げられる[注6]。こうした点字ユーザーが使える自動販売機を目指した取り組みも、大学内の点字表示をより充実させるためにできることである。

⑤ 大学の全体像を示した点図を作る

アンケート回答者からは、点図を求める声も複数寄せられた。視覚障害者が点字ブロックを活用して一人で歩く際には、脳内で描いた地図（メンタルマップと呼ばれる）をもとにして自らの位置、進むべき方向を把握している[注7]。点図はこのメンタルマップ作りに有用だと考えられる。一方で、アンケート調査回答者8人のうち3人が点図を読み取るのは苦手ゆえ、フロアマップの点図はあまり使わないと回答していた。点図の読み取りの難しさは2016年度の11月祭研究を合わせて参照されたい[注8]。したがって、大学の全体像を示すような点図を作ればそれでよいという訳ではなく、点図を簡明化する、また必要に応じて点図を使いながら晴眼者による口頭説明も行うといった点に留意する必要がある。

4. おわりに

まず最初に、本章は視覚障害学生の方々のご協力のおかげで成立したことを言わねばならない。アンケートや聞き取り調査にご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。

さて、これまで大学構内の点字表示について、アンケート調査の結果を軸として眺めてきたが、「はじめに」で列挙した疑問に回答すれば、一定数の視覚障害学生が大学構内の点字表示を実際に使っている。大学構内で点字表示が求められる場面はたしかに存在する。そして、視覚障害学生の立場から見て、大学の現状がベストという訳ではない。全ての建物への点字表示の配置およびその位置の統一、点字表示が存在することの情報提供、定期的なメンテナンスの実施、点字付き自販機の検討、キャンパスマップの点図化など、改良できる余地が存在する。

なお、本章では大学の人的・経済的事情を一切考えなかった。それゆえ、前節で述べたことは現実性に欠ける部分もあろう。点字表示を設置する主体たる大学側の事情を考慮に入れていない点で、課題が残る。

最後に、冒頭で提示した作文の締めくくりの部分を紹介する。

点字は、私に新しいことを教え続け、大切なことに気づかせてくれたかけがえのない存在です。… (中略) …これからも、点字が私の世界を広げてくれる、希望の1点であり続けることに変わりありません。

点字には価値がある。そのことを本章も伝えられていれば幸いである。

注釈

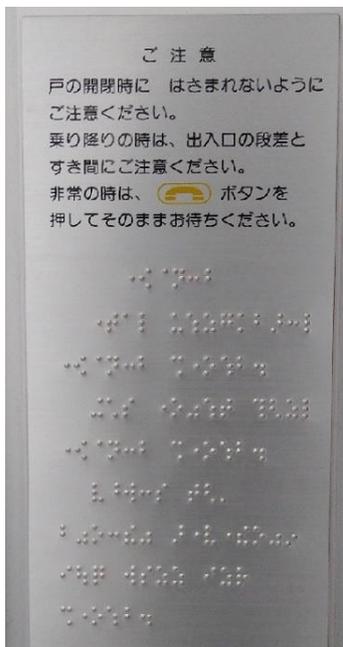
- [1] ONKYO HP 「第16回オンキョー世界点字作文コンクール 国内部門」
<https://www.jp.onkyo.com/tenjisakubun.htm> 2018年11月13日最終アクセス
- [2] 関西 Student Library についての詳細は下記 HP を参照いただければ幸いである。
<http://kansaisl.web.fc2.com/>
- [3] 立命館大学衣笠キャンパスのマップにあった説明から、教室を有する建物であることがわかった14棟（存心館、興学館、志学館、以学館、研心館、学而館、有心館、清心館、洋洋館、恒心館、諒友館、明学館、敬学館、充光館）のうち、有心館を除く13棟を訪問した。調査日11月10日。キャンパスマップについては以下を参照した。
立命館大学 HP「衣笠キャンパス」 <http://www.ritsumei.ac.jp/campusmap/kinugasa/>
2018年11月10日最終アクセス
- [4] 本章で使用した写真は全て著者撮影。
- [5] 点図の存在にそもそも気づかないことを指摘した調査として、2016年度の11月祭研究に所収されている「身のまわりの点図」を参照されたい。
http://www.geocities.jp/kyoto_tenyaku/nf/nf16.pdf
- [6] ムツボシくんの点字の部屋 HP「ムツボシくんの仙台全盲物語」
<http://nagao.miyakyo-u.ac.jp/monogatari/2014.html#140101>
2018年11月14日最終アクセス
- [7] 同行援護従業者養成研修テキスト編集委員会『同行援護養成研修テキスト第3版』中央法規出版株式会社、2015年、pp.100-102
- [8] 注[5]に同じ

◎補論 京都大学で見つけた興味深い点字表示



↑トイレの壁にあった点図。実際には男子トイレ・女子トイレも多機能トイレの隣にあるのに、多機能トイレの案内しかない。

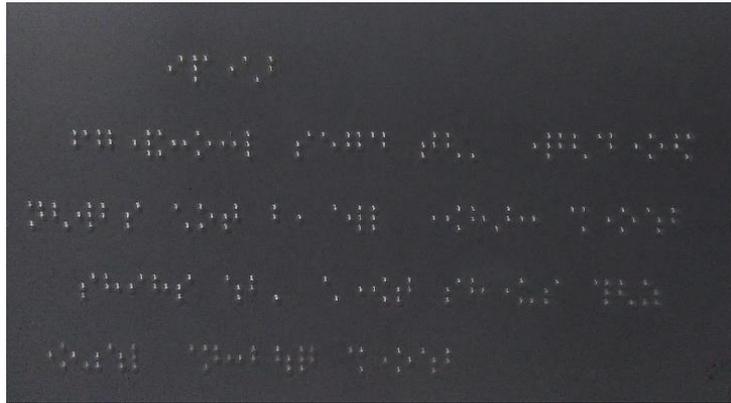
しかもゴミ箱が手前があるので、→
手を伸ばさないと触れない



エレベーターの注意書き。点字では「非常のときはインターホンよびボタンを押してそのままお待ちください」と最後に書いている(下線は筆者)。



↑同じエレベーター内。ボタンの横には「よび」ボタンではなく、「ひじょー」と点字で打たれている。注意書きと不統一。



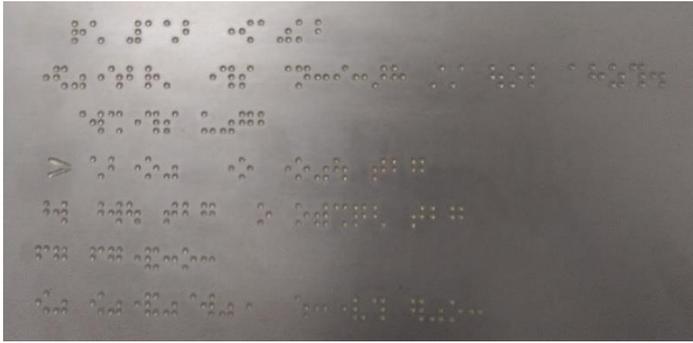
エレベーター入口の注意書き。一文目に「エレベーターに乗られる時はできるだけ付き添いの方と一緒にご利用ください」と点字で書かれており、視覚障害者が一人で乗ってはいけないの？ となる。ちなみに、この点字表記には句読点がなく、また「注意する」を「ちゅーい する」と分かち書きせずに、「ちゅーいする」と続けて書いている点で、一般的な現在の点字表記法と異なる書き方をしている。



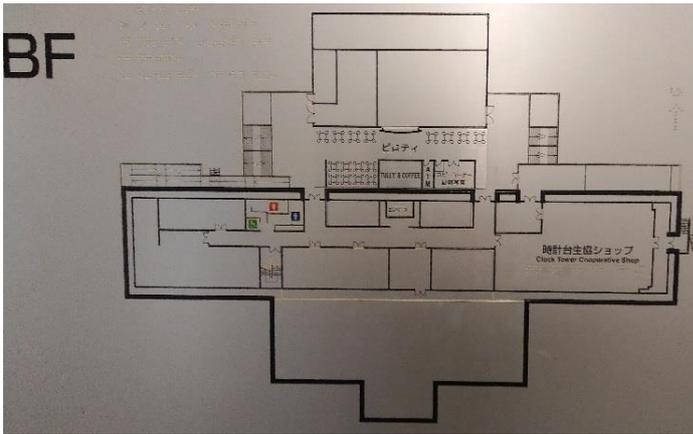
↑ 点字の上からシールを貼ったり、金属板を貼ったりして点図を更新している。一度設置した点図のアップデートは手間のかかる作業であることがわかる。

写真左上に点図があるが、高いところに設置されているため、手を伸ばさないと届かない。 →





←点字付き地図の端に書かれた説明書き。これによると、地下1階には点図内に「コン」という点字があり、それは「コンベンション・サービスセンター」の場所を表すらしい。



←しかし、地下1階の地図にはコンベンション・サービスセンターも、「コン」という点字もない。昔はそのセンターが地下にあったのだから、今は1階に移っており、地図は更新された(当該点字が消された)が、説明書きは修正していないのだと思われる。

1. はじめに

現代社会を特徴づける表現として「情報社会」という語が用いられるようになって久しい。事実、屋内外を問わず、我々の日常生活は文字や図像といった種々の情報に常に囲まれており、その情報の取捨選択と活用が我々の意思決定を大きく左右している。また斯様な情報の大部分が視覚を通してのみ得られる情報であるとも言えるだろう。では視覚情報を満足に享受できない視覚障害者は、これらの情報に対してどの程度のアクセシビリティを保持しているのだろうか。本稿ではこうした問題を検討するきっかけとして、我々の身の回りに見出すことのできる点字付きの製品（点字製品）と点字情報付きのサービス（点字サービス）をいくつか紹介する。

さて、本稿の企図を果たすためにも、最初に断りを入れたうえで本稿の射程を明確にする必要がある。まず本稿で紹介する点字製品・点字サービスは決して網羅的ではないし、その代表性も担保されていない。すなわちここで紹介される点字製品・点字サービスのみに基づいて、点字による情報提供の現状を一般的に論じることはある種の飛躍を伴うことに注意しなければならない。また視覚障害者と一括りにしても、その内実は複雑な多様性を含んでいる点にも注意を要する。実際、今日の日本における視覚障害者全体のうち、点字を日常的に用いている人の割合は限定的である[注 1]。したがって視覚情報へのアクセシビリティ保障に対する点字媒体の貢献度は批判的な吟味の対象となり得るし、反対に点字以外の媒体によるアクセシビリティの保障について検討することも今後のバリアフリー社会を考えるうえで極めて重要である。

以上の断りを踏まえたうえで、本稿の目指すところは、視覚情報へのアクセシビリティを向上させる（現状ないし今後の）取り組みのあり方について考えるきっかけと手掛かりを与えることである。実際問題、たとえ文字媒体に限定するとしても、世に溢れる視覚情報をすべて点字に変換して表示することは不可能に近い。ましてやイラストや動画等を点字で表現するとなると、膨大な人的・社会的リソースを割かねばならなくなる。したがって点字製品・点字サービスの供与は、(1)どの情報を(2)どんな仕方で与えるかという問題を必然的に孕むことになる。現実にある点字製品・点字サービスに目を向けることで、それぞれの供給者が(1)と(2)に関してどのような取捨選択を織り込んでいるのかを見ることができる。さらにその視点を通して視覚障害者がどのような情報を求めているのかを再検討する手掛かりも得られるだろう。

2. 点字製品

○食料品

晴眼者・視覚障害者を問わず利用するもののうち、点字が付されていることが多い商品の一つとして食料品を挙げることができる。特に調味料類は同じパッケージを長期間にわ



写真1 (トマトケチャップ) 写真2 (ソース)



写真3 (缶ビール) 写真4 (焼酎)

○日用品

続いて日用品の例を見ていこう。日用品に点字が付される傾向があるのは大別すると次の二つの場合である。一つは食料品と同じくパッケージから中身が判別できない場合であり、もう一つはボタン等を扱う操作が視覚抜きでは分かりづらい場合である。

パッケージから中身が判別できない例としては洗剤や入浴剤が挙げられる。バスクリン社が製造している入浴剤のバスクリンはパッケージの蓋に「(バスクリン)」と点字で書かれている(写真5)。箱型パッケージに入れられた洗剤や入浴剤は、視覚を使わなければ調味料類と混同してしまうおそれがあるが、口に入れると命にかかわるため、点字によって識別を促すことは大変重要である。

ボタン操作に関する情報を点字で伝える例はいわゆる白物家電に多く見られる。洗濯機や炊飯器はその代表であり、多くのメーカーの製品に点字が打たれている(写真6)。またトイレのウォシュレットのボタンに点字を見る機会も多いだろう。当然ながらこれらの製品を利用するには各種のボタンを押すことによって命令を入力しなければならないが、ボタンそのものは視覚を通して認識されることを前提に設計されているように思われる。そのため点字を補うことで各ボタンと各命令の対応関係の情報を点字ユーザーに与えること

ができ、それによって当該製品が利用しやすくなっていると言える。



写真 5 (バスクリン)



写真 6 (洗濯機)

3. 点字サービス

我々の身の回り、特に屋外には多様なサービスが存在する。そのサービスに必要な情報の大半が墨字によってのみ提供されているが、とりわけ不特定多数の人々が利用するようなサービスでは点字によって必要とされる情報を視覚障害者向けに提供するものも認められる。本節ではそのような点字サービスが供与される場の例として駅と銀行を紹介する。

○駅・電車

まず駅での点字サービスを紹介する。今日では駅の自動券売機の多くに点字が付されるようになった。具体的には、お金の投与口や音声案内用のボタンの箇所が点字で分かるようになっているものがある。また現代の券売機はタッチパネル式のタイプが多く、視覚障害者には利用しにくくなっている。だが同時に数字のキー（テンキー）が備え付けられているタイプのものは、そのキーによる入力によって切符を購入できるよう設計されている。写真 7 は阪急梅田駅の自動券売機だが、これにはテンキーとその上にテンキーの使用を促す点字の案内を見ることができる。

同じく駅構内で見られる点字として、点字案内板も最近では様々な駅に設置されるようになりつつある。写真 8 は阪急河原町駅の点字案内板である。主に点によって改札付近の地理的な配置が触読できるようになっているほか、白と黒を基調とした色遣いにすることで弱視者も見やすいよう配慮されている。

さらに駅構内だけでなく、電車のなかにも点字による案内がある。写真 9 は京阪本線走る車両のドアに貼り付けられた点字案内である。上部には点字で「 $\begin{smallmatrix} \bullet & \bullet & \bullet & \bullet \\ \bullet & \bullet & \bullet & \bullet \\ \bullet & \bullet & \bullet & \bullet \end{smallmatrix}$ (8ノ1)」と書かれており、下部には触読可能な記号を用いて車両とドアの位置が判別できるようになっている。



写真 7 (券売機)

写真 8 (点字案内板)

写真 9 (車両とドアの案内)

○銀行

次に銀行での点字サービスを見ていこう。銀行では ATM の各部に点字が打たれていることがある。写真 10、11 は南都銀行の ATM である。ここでは現金や通帳を入れる箇所にも点字が見られたほか、音声案内用の受話器もあり、その受話器にも音量操作のボタン等に点字が打たれていた。

無人端末に点字案内があるという点では駅の券売機と銀行の ATM は似通っている。だが前者の操作は知人や周囲の晴眼者に頼んで代行してもらいやすいのに対して、後者のそれは気軽に他人に任せられるものではない場合がある。そのため ATM に関しては、視覚障害者が自力で利用せねばならない必要性が高く、点字による誘導が一層重要であると言えるだろう。その一方で ATM への入力タッチパネルで行われるため、視覚障害者にとって操作のハードルは依然として高いと考えられる。



写真 10 (ATM の硬貨投入口)

写真 11 (ATM の音声案内)

4. 総括

ここまでで我々の身の回りにある点字をかいつまんで紹介してきた。本稿で紹介できた

のは実際に流通している点字製品・点字サービスのごく一部に過ぎないが、それでも意外に数多くの点字に囲まれて我々が普段過ごしているということに驚く人もいるかもしれない。またある人は現状の点字による情報保障に疑問や違和感を感じるかもしれない。最後にこうした所感を回収する形で点字製品・点字サービスの現状について着目すべき点を可能な範囲で分析したい。

第一に本稿で紹介した点字製品の一定数とその製造企業によってオープンに宣伝されているという点には注意を払う価値がある。宣伝の多くは企業のホームページや通販ページといったウェブ上で確認することができ、そこでは企業として障害者に対する配慮を行っていることが多かれ少なかれアピールされている[注9]。この事実から伺えるのは、点字の表記が製品の売り上げ向上にどれだけ貢献するかは措くとしても、少なくとも企業が点字製品の製造と宣伝が持つ戦略的な有効性を認めているということである。特に何かしらの企業のイメージアップを企図してこうした宣伝に手間が費やされていると推測できる。こうした現状を踏まえると、法的な義務や道徳的な規範はもとより、より実践的な動機付けから企業が主体的・積極的に点字製品の製造規模を今後拡大していくことを期待することは、多少の希望的観測こそあれ、全くの不合理であるとは言えないだろう。

他方で、点字製品の拡大とは裏腹に、点字による情報保障の現状は質と量、二重の意味で不十分であると言える。量に関しては、現在見られる点字製品・点字サービスの数と種類が非常に限られているということが指摘できる。ではどれだけ拡充すれば十分なのか、という問いに説得的な回答を与えることは困難を極める。だがすでに紹介したように、缶や紙パックをパッケージとするアルコール飲料には「オサケ」の点字表記が数多く見られるにもかかわらず、瓶に入ったアルコール飲料には同表記がほとんどないという現状に一貫性がないという主張は情報保障の観点からは少なくとも妥当であり、今後の改善の余地があるところである。このように個別の事例に照らし合わせて点字による情報保障の量の十分性を適宜確認する作業は可能である。

次に質の面においては、冒頭で示した(1)どの情報を(2)どんな仕方で点字として提供するのかという取捨選択について疑問を付すことができる。たとえば「バスクリン」とだけ容器に点字で書いてあったとしても、そのバスクリンの種類に関する情報は得ることができない。したがって複数の種類のバスクリンを家に常備する点字ユーザーからすると、容器に入っている内容物がバスクリンであることそのものよりも、それがどの種類のバスクリンなのかに関する情報の方にニーズがあるかもしれない。また「(2)どんなしかたで」に関わる問題として、駅や電車内のサービスには点図を用いた案内板や表示が見られたが、視覚障害者への情報保障としてこの仕方が最善なのかどうかは一考の余地がある。点図は点字と比べると相対的に一般的と呼べる読み方・描き方を備えておらず、触読するにも点字以上に時間と技能を要することが少なくない。ゆえに点字製品・点字サービスの提供者は、点字を用いるのか、点図を用いるのか、どのように点で表現するのかといった事柄についての吟味を欠かさず意識せねばならないと言える。

晴眼者の多くは身の回りにある点字に気付かないかもしれない。だからこそ今後の情報社会、そしてバリアフリー社会を考えるうえでは、身近な点字に目を向けることが新たな発見と示唆の源となることだろう。

注

- [1] 厚生労働省の調査によると、近年の視覚障害者全体に占める点字ユーザーの割合は12.7%に留まっている（厚生労働省 2008, p. 24）。
- [2] 写真1は筆者が撮影。以下、特に断りのない限り、掲載されている写真は筆者が撮影したものである。
- [3] 「オタフク ホームページ」を参照。写真2も同ウェブページより借用。
- [4] 「キューピー ホームページ ニュースリリース」を参照。
- [5] 「味の素 商品情報サイト」を参照。
- [6] 「ポッカサッポロフード&ビバレッジ ホームページ」を参照。
- [7] 「ハウス公式通販 ハウスダイレクト」を参照。
- [8] 「共用品推進機構」を参照。
- [9] 参考文献に掲載している各種ウェブページを見よ。

参考文献

「味の素 商品情報サイト」（2018年11月13日最終アクセス）

https://www.ajinomoto.co.jp/products/anzen/kodawari/step1/pack_dev.html

「オタフク ホームページ」（2018年11月13日最終アクセス）

<https://www.otafuku.co.jp/qr/100113/qanda.html>

「キューピー ホームページ ニュースリリース」（2018年11月13日最終アクセス）

<https://www.kewpie.co.jp/company/corp/newsrelease/2008/02.html>

「共用品推進機構」（2018年11月13日最終アクセス）

http://www.kyoyohin.org/20_search/p_detail.php?p_id=0000000000000307

厚生労働省（2008）『平成18年身体障害児・者実態調査結果』

「ハウス公式通販 ハウスダイレクト」（2018年11月13日最終アクセス）

<https://www.house-direct.jp/product/c1000>

「ポッカサッポロフード&ビバレッジ ホームページ」（2018年11月13日最終アクセス）

<https://www.pokkasapporo-fb.jp/lemon100/lemon/package.html>